

書 評

有江大介編著『ヴィクトリア時代の思潮と
J. S. ミル—文芸・宗教・倫理・経済—』(三
和書籍、2013)



光永 雅明

J. S. ミル(1806-1873)研究が活況を呈している。トロント大学版ミル 著作集の完結を背景として、近年の英語圏では膨大な研究成果が生み出されておき、日本でも単行本や論集等の出版が相次いでいる(その詳細については、川名雄一郎氏による以下の優れた研究動向を参照されたい。「新しい資料、新しい思想?—近年の J. S. ミル研究」『経済学史研究』56 巻 2 号、2015 年 1 月、pp. 67-93)。

その日本における近年の主要な成果の一つが本書である。編者の有江大介氏によれば、本書は、ミルを媒介としてヴィクトリア時代の思潮をできる限り鳥瞰し、各研究領域を架橋するとともに、日本のミル研究では比較的手薄だった「ロマン主義や宗教、文芸や古典趣味など」を当時の文脈で捉え直すことを目指している。またミルの「現代にとっての先駆的意義」も、日本では看過されがちだった「認識論、幸福論、正義論」を通じて提示することを試みている。なお、ほとんどの論文がミルを主題とし、もしくはミルに紙幅を割いているため、以下でも本書のミル研究論文集としての側面を主として取り上げるが、適宜、ヴィクトリア時代思潮研究としての側面にも言及することとしたい。

まず本書の構成であるが、全 10 章からなり、第 1 章から 4 章までが主としてロマン主義、宗教、文芸、古典趣味に焦点を当てたもの、第 7 章から 10 章までが主として認識論、幸福論、正義論に焦点を当てたもの、そして第 5 章と 6 章が、中間的な性格のものとも考えることも許されよう。

は各章の内容の紹介に移りたい。第 1 章「J. S. ミルとロマン主義—ワーズワス、コールリッジ、カーライルとの関わり」(泉谷周三郎)は、

1830年代を中心にミルの思想形成を論じる。特にミルが、ウィリアム・ワーズワスからは「道徳感情の陶冶」の重要性を、トマス・カーライルからは「ドイツ哲学とゲーテの思想」を学び、また S. T. コールリッジからその社会・政治思想を吸収したことが、伝記的背景にも立ち入りつつ描き出され、ミルが経験論と功利主義を堅持しつつも、ロマン主義から大きく影響を受けたことが印象深く示される。ミルの幸福観や宗教観など、のちの章で扱われる論点のいくつかに言及しており、ハリエット・テイラーとの交際など伝記的情報も多く、本書全体への導入とも言える章となっている。

第2章から4章は、ヴィクトリア時代の様々な思潮を検討し、翻ってミルの思想にも光を当てるものと言えよう。まず第2章「ヴィクトリア期の時代思潮における中世主義と古典主義」(深貝保則)は、当時の中世志向を綿密にたどる一方、ギリシア史論の変遷を題材に古典古代志向を論じ、後者に関連してウィリアム・ミトフォードの著作にスコットランド啓蒙の文明史論が浸透しているとの重要な指摘をしている。さらに、ジョージ・グロートによる『ギリシア史』は、アテナイ民主政を専制と見なすミトフォード史観の克服を目指したものであるとし、近年の研究も踏まえて、ミルの政治思想形成の文脈にも新しい光を投げかけている。二つの志向性は直接対峙せず存在した—ただしマシュー・アーノルドにおいて交叉した—との指摘も興味深い。

第3章「イングリッシュ・ユニテリアニズムとヴィクトリア時代思想」(船木恵子)は、ジョウゼフ・ブリストリーの思想も詳細に分析したうえで、近代ユニテリアニズムのヴィクトリア時代への多様な影響を論じる。まず、ブリストリーの自然概念との対比という新鮮な視点から、ミルの『宗教三論』(1874)における自然概念の特色が詳しく検討されているのが、注目される。また、男女平等的で自由なユニテリアン教育システムが、ハリエット・マーティノーら女性の社会改良家を生みだした経緯の叙述は、本章で直接扱われてはいないが、ユニテリアンとして育ったハリエット・テイラーの思想形成を考える上でも示唆に富むと思われる。

第4章「J. H. ニューマンの知識論—ヴィクトリア時代の信仰と科学」(有江大介)は、ジョン・ヘンリ・ニューマンの知識論を検討する。主著

『承認の原理』(1870)に至るニューマンの著作群の詳細な吟味から著者が導き出すのは、単なる直覚主義だけではなく、科学的認識の意義をも承認した上で信仰の確実性を求めざるをえなかった、ニューマンの議論の「2面性」である。オクスフォード運動に対する論評を中心にミルの思想も検討しており、『承認の原理』と『宗教三論』は当時の知識人層に与えた衝撃において「表裏一体」だったとの指摘はとくに興味深い。「信仰によって本質的な危機の時代」と著者が述べるヴィクトリア時代の宗教意識 それ自体についても、多くの示唆を与える章である。

第5章「オウエン、トンプソン、J. S. ミル—ヴィクトリア時代のアソシエーション論」(安井俊一)は、オウエン主義者ウィリアム・トンプソンの著作や、1825年に開催された哲学的急進派とオウエン主義者の公開討論等を丹念に分析し、先行研究の議論も参照しつつ、ロバート・オウエンの思想よりも、自由な労働観に基づいて徳の高い小規模で民主的なコミュニティを実験的に建設するトンプソンの構想こそが、ミルのアソシエーション論に近いと論じる。ミル自身の言及がほとんど無いトンプソンの議論に焦点を当てることにより、ミルの思想を新しく再考する試みである。

第6章「J. S. ミルと S. スマイルズ—ヴィクトリア時代の思潮—」(矢島杜夫)は、『自由論』(1859)等に見られるミルの思想と、『自助論』(1859)等に見られるサミュエル・スマイルズの思想を詳細に比較し、自由は人間の幸福に寄与し、自由の確固たる基礎は個人の人格にあるとする点で両者の見解は共鳴すると論じる。さらに、女性の役割や、参政権・社会主義・穀物法といった政治・社会問題への両者の見方、そして明治期日本における両者の著作の受容など、多彩な材料から二人の比較検討が行われ、両者の思想に幅広い角度から光が投げかけられている。

第7章「ジョン・ステュアート・ミルと直観主義形而上学」(大久保正健)は、ウィリアム・ハミルトンの直観主義との対比からミルの認識論の特色を詳細に論じており、とくに、ミルには従来の英国経験論にはない独自の感覚主義の議論が見られるとの指摘が興味深い。またミルが「キリスト教に親和的な」形而上学の切り崩しを図り、他方、ミルの認識論から神は自然内の現象であって全能ではないという見方『宗教三論』が生まれ

ていることも著者は指摘し、ミルの認識論が有していた宗教的含意も明確に示している。なおミルの宗教観とリチャード・ドーキンズのそれに関連づける言及もあり、ミル思想の現代的な意義という点でも示唆に富む。

第 8 章「J. S. ミルにおける徳と幸福」(水野俊誠)は、ミルにおける「徳と幸福」との関係、とくに、徳は「幸福の一部」であるという『功利主義論』(1861)での主張を吟味する。この主張は、徳は快樂(幸福)と観念連合するとその一部として望まれることを意味するが、その快樂には、「有徳な性格」を自分が持つと意識する快樂も含まれると著者は強調し、その観点から、この主張に関する従来の解釈も綿密に検討している。また快樂と観念連合したものも望まれ、望ましくなるというミルの考え方を「拡張された快樂主義」と呼び、そこに過剰な快樂追求と禁欲主義の双方を免れる道への示唆を読みとる著者の議論も興味深い。

第 9 章「J. S. ミルの経済思想における共感と公共性」(前原直子)は、「共感」や「公共性」という概念を積極的に用いて、ミルの経済思想の再考を試みている。著者は「共感」に関するミルの議論を整理したうえで、各人の「共感能力の向上」がひいては社会全体を「公共心の体系=人間愛の体系」へと変革するとミルは論じており、ミルにおいて「人間的成長論」と「社会変革論」は「共感原理によって有機的関連性を持つ」と指摘する。『経済学原理』(1848)でミルが提唱した、株式会社とアソシエーションによる社会変革論を、新しい視点から捉え直そうとするものである。

第 10 章「アマルティア・センにおける J. S. ミルの評価」(朝日讓治)はセンにおけるミルの影響を探る。センによれば、経済学は、かつてミルらの影響のもと「倫理学」の側面を有していたが、その後、「工学的手法」が主流となった。この現状を批判する、「ケイパビリティ」に主軸をおくセンの体系には、ミルの『自由論』を吸収した自由概念が大きな役割を果たしている。他方センの民主主義論には、ミルの「討論による統治」のアイデアや、ミルらに由来する正義へのアプローチの吸収が見られる。センの著作群の検討からミルの今日的意義を浮かび上がらせる章となっている。

以上見て来たように本書には、日本におけるミル研究では看過されがち

だった主題のものを中心に、注目すべき論考が多く含まれている。現在の日本におけるミル研究の成果と方向性を理解する上で、本書はまさに参照が不可欠の論集であると言える。なお安井氏、水野氏が本書刊行後、ミルを主題とする単著を上梓されたことも付記しておきたい(安井俊一『J. S. ミルの社会主義論—体制論の倫理と科学』御茶の水書房、2013; 水野俊誠『J. S. ミルの幸福論—快樂主義の可能性—』梓出版社、2014)。

またミルの宗教思想を理解する様々な手掛かりを提供していることも、本書の大きな特色にあげられよう。ミルの宗教思想自体を表題に掲げる論文は無いが、有江氏らこの主題の代表的な研究者を執筆者に含む本書の少なからずの箇所、ミルの宗教観への言及がある。また第3章、4章、7章などは、ミルの宗教観を理解する上でも不可欠な思想史的文脈を提供している。

他方、政治思想、経済思想、フェミニズム思想など、これまで日本のミル研究でも検討が進んできたテーマとの様々な関連や接点も、多くの論文から窺える。これらも糸口として、本書の成果と内外のミル研究の成果とのさらなる対話が、今後一層、深まることが期待できよう。なお、第1章の青年期の伝記的叙述以外にも、ミルの生涯についてまとまった記述があれば、専門的なミル研究者以外にとって、さらに読みやすくなっていたのではと思われる。

本書評では十分に触れられなかったが、ヴィクトリア時代の思潮全般に関しても、新鮮な視点や議論が本書には含まれている。ミルの研究者は無論、ヴィクトリア時代に関心を寄せる人すべてに本書の一読を勧めたい。